

小高復興デザインセンターの活動

部会の開催

2016年は、小高区に関わる主体間で現状や今後起こりうる課題を共有し、それを解決するためのアイデアを話し合う場として、部会を開催しました。

まちなか、つながり、なりわい、災害リスクの4つの部会を設けて、それぞれのテーマについて、住民の皆さん、行政の担当者、専門家などが集まり、話し合いました。



まちなかでの 菜園づくり活動

まちなかでは、住民の皆さんと、災害公営住宅の空きスペースや建物解体後の空き地を活用した菜園づくりを行っています。土いじりや野菜づくりを通じた交流が生まれています。



大蛇伝説まちあるき



小高の歴史・文化資源をめぐるまちあるきを市民有志や市教育委員会と共同で開催しています。小高区内外から多くの方にお越しいただいています。

高校生によるまちづくり支援



南相馬市内の高校に通う高校生がつくる団体（LLO）が行っている小高区内のまちづくり活動を支援しています。2017年度は歴史的な建物を活用したカフェや、通学路に設置するベンチづくりなどを行いました。

第2章

やってみよう！ 8つのテーマ・24の提案

ここからは、
8つのテーマ別に具体的な提案をします。
興味のあるテーマだけでも
ご一読いただき、
行政区での活動に
つなげていただけると
本望です。

行政区の 今を知る

行政区での暮らしや、行政区内の風景は震災前から大きく変わっています。そして、今なお、状況は日々変化しています。行政区の「これから」を考えるには、まず行政区の「今」を知ることが重要です。行政区の中で、変わってしまったものと変わらないもの、課題になりそうなこと、まちづくりの資源となりそうなことを把握することで、行政区のこれからの考えるきっかけやヒントになります。



提案

1

行政区を歩いて点検する

行政区の皆さんで、行政区内を歩いて、帰還している世帯、よい景観、きれいな庭、荒れている場所、危険な場所などを点検します。

▶ 効果

- 皆さんで行政区内の現状や課題を共有
- 行政区内のよいところの再発見

事例 浦尻あるき

浦尻行政区では、現状を把握するため、行政区内を歩きました。

海岸防災林の整備状況、大豆実証栽培の様子などを見て回りました。途中、住民の皆さんから震災前の様子などの話もありました。



↑浦尻あるきで使用した”まちあるきマップ”



提案

2

みんなの意向を把握する

農地などの土地を今後どのように維持・活用するか、今後どのように行政区と関わっていくか、聞き取りやアンケートで地権者や住民の方々の意向を把握しましょう。

▶ 効果

- 土地の管理方針や、人足などの体制検討の前提条件整理

事例 意向調査アンケート

浦尻行政区では、土地の利用・管理についての意向調査アンケートを行い、結果を地図にまとめました。どのあたりに、管理が課題となる農地が分布しているか、わかりやすく把握できるようになりました。片草行政区や神山行政区、上浦行政区などでも同様のアンケートを実施しているようです。



提案

3

行政区の今を地図にする

提案1や2などで把握した行政区の状況を、地図上に書き込んでみましょう。シールや虫ピン等を利用すると簡単にわかりやすくまとめることができます。地図以外にも模型を作ったり、写真集にまとめたりする方法もあります。

→このように作業するとわかりやすいです。



▶ 効果

- 多くの人と、状況や課題を共有可能。また、説明がしやすくなる。

郷土芸能や 文化的資源を伝える

小高区は津波により、神楽5団体と田植踊1団体が大きな被害を受けました。そして避難指示が長期に渡り、人々が離ればなれになったため、内陸部の行政区でも郷土芸能が続けられない、村社やお寺・仏閣、文化財も維持が困難になる等、様々な問題が生じています。地域で長年親しまれてきた郷土芸能や文化的資源は、地域コミュニティの拠り所となる重要な資源です。地域外にもファンを増やし、維持・活用の道を模索してみませんか。



提案 4 行政区あるきを 開催する

行政区の人のみぞ知る場所をみんなで歩いて回るツアーを開催してみませんか。

- ▶効果
- 行政区内外から参加者を募って、新たな視点で価値を再発見
 - SNS等での周知効果
 - 新たな散歩コース開拓のきっかけづくり



2015年10月、上浦あるき開催→



事例

事例
←上浦あるきで配布したマップ

提案 5 行政区の宝 展示の場をつくる

期間限定で場所を借り、各々の宝（神楽の道具、各家庭にあるお宝等）を展示して、歴史の町小高をPRしていきませんか。他行政区と連携したイベントにすると張り合いも出て良いかもしれません。

- ▶効果
- 身近にある資源を活用するイベントを通じた地域コミュニティの再構築



↑昔のポンプ車や古写真が展示されている角間澤民俗資料館

小高区における指定文化財

国指定文化財	薬師堂石仏 附阿弥陀堂石仏／観音堂石仏／浦尻貝塚／横大道製鉄遺跡／相馬野馬追
県指定文化財	大名婚礼調度品／大悲山文書／小高城跡／大悲山の杉／相馬野馬追額／蛸沢稲荷神社奉納絵馬地引大漁図及び和船模型
市指定文化財	裏割蓋付舟形剥抜石棺／藪内の十一面観音／中村迫の文殊菩薩座像／中村迫の虚空蔵菩薩座像／下岩崎の聖観音菩薩座像／八幡大菩薩旗／能束帯／伝相馬昌胤着用白羅紗地陣羽織／麻地錆浅葱色大紋／女房火事束帯／野馬狩の告文／相馬家系図／小高城跡採集金鯰片／生駒家文書／相馬家墓地並びに相馬家霊堂／浪岩横穴古墳 A 群 11 号／村上城跡／菖蒲沢の野馬土手・高木戸の野馬土手／小谷津の貝塚／片草の貝塚／角部内南台の東貝塚／角部内南台の南貝塚／浦尻の神ノ前貝塚／浦尻の北向貝塚／浦尻の北原貝塚／上浦の加賀後貝塚／上浦の宮田北貝塚／上浦の宮田東貝塚／日向横穴群 1 号墓／岩屋堂石仏並びに横穴墓群／行津の大杉／同慶寺のいちよう／飯崎のしだれ桜／上浦のキャラ／大富のヒラギ／金谷の獅子舞

提案 6 地域に開く

住宅や園庭等の公開日を設けてみませんか。

- ▶効果
- 記録・印象に残す
 - 地元が近い、歴史・建築分野に明るい方等、多方面からの需要に応えられる



↑2017年12月に公開された天野家

事例 小高思ひ出かふえ まなびあい南相馬・小高の歩みたんがく会

震災後、登録文化財となった高島家住宅コンクリート蔵にて、古写真を白壁に投影し、珈琲をいただきながら、思い出を語り合う「小高思ひ出かふえ」が開催されました。小高駅前通りの秋祭りと同時期に開催し、2日間で約197名が訪れ、ふるさとの記憶を共有しました。



→高島家外観



↑2016年10月、高島家住宅蔵で実施された小高思ひ出かふえ

提案 7 教育分野と 連携する

小・中・高等学校教育や生涯学習と連携し、地域の伝統芸能・文化を活かしましょう。

- ▶効果
- 子どもから大人まで多世代の地域学習
 - 学校が地域と関わる手段として有効



事例 田植踊りが繋ぐ 地域の絆

村上行政区 村上田植踊り保存会



↑後継者育成のため、田植踊りをDVDに。

津波による甚大な被害を受けた村上行政区では、田植踊りの踊り手も十数名が亡くなり、衣装も流失してしまいました。そんな中、民俗芸能学関係の専門家の支援を受けながら衣装を新調し、震災から一年後の2012年10月頃、郡山市の民俗芸能発表会にて、早くも再開を果たしました。

再開してからは年に数回、郡山市、貴布根神社、NHKホール（東京）、東京国際劇場、小高秋祭り、南相馬復興あきいち等のさまざまな場で発表されています。

現在、踊り手は30名程度となっていますが、泉沢・角部内等、他行政区からも応援を募って再開しています。踊り手は避難されていてみんなばらばらなので、通しの練習は一週間前に一度行う程度となっています。交通費や謝礼もなく、会費もない中で、踊り手の方々のボランティア精神でここまで続けられています。

再開して良かったことを伺ってみると、田植踊りを開催する場所へ、避難先から踊りを見に来られる村上出身の方もみられるようです。また、何かの機会がないとなかなか元の行政区民で顔を合わせることがない中で、田植踊りはそのきっかけにもなっています。これから次の世代へ継承していくために、平均年齢60代後半という中、田植踊りのいろはをDVDで残したり、小学校に年2回程出向き、踊りを指導したりしながら、後継者育成に励んでいます。

災害遺構・被災の記憶を継承する

津波被災の影響を強く受けた地域では、被災した建物や構造物を「災害遺構」として残し、震災・津波の恐ろしさや教訓を後世に伝えていくための取組みがよく見られます。

南相馬市では、原町区北泉海浜総合公園に隣接して、メモリアルパークの整備の検討などが行われています。全国的にも希少な地震・津波・原発事故の複合災害を受けた小高では、何を後世に残し、伝えていくべきでしょうか。

提案
8 語り部を
地域で支える

震災を経験された方のお話を伺うと、当時の様子や複合災害が何をもたらしたのかまで、鮮明に伝わってきます。それは、震災後の来訪者や次世代の子どもたちにとって、ただその場所を見学するだけでは伝わり切らない、災害の教訓伝承には非常に重要な手段です。一方で、話し手からすれば、負担の大きいことでもあります。無理のない範囲で、伝えるべきことを伝えていけるような仕組みを地域でつくっていきませんか。映像記録に残すなど、取り組みやすいことから始めていきましょう。



↑ 浜通りにおける災害・復興を伝承する施設

- ▶ 効果
- 話し手の負担軽減
 - 複合災害からの教訓を伝え続ける

事例 牛舎が伝える原発被災 大富行政区

原発事故によって、牛舎から出ることが許されなかった40頭の牛たちが、生きるために必死にもがいていた生々しさが、今も残る牛舎の柱の痕からひしひしと伝わってきます。



↑ 2018年1月、牛舎内の様子

提案
9 手づくりの復興展示コーナーをつくる

公会堂等を活用して、災害当時の行政区のこと、復興のあゆみを展示し、不定期でも開館日を設けてみるなど、行政区でどのようにして復興してきたのか、伝えていく場所をつくっていきませんか。

- ▶ 効果
- 風化防止
 - 防災意識の向上

事例 復興交流館「モンドラゴン」
広島県広島市安佐南区



2014年8月20日に発生した広島土砂災害で、最も被害の大きかった八木3丁目に、2016年4月3日、被災者自らの手でプレハブの「復興交流館」を建設しました。被災地の住民相互のコミュニティづくり、災害弱者への支援、災害教訓の伝承等を目的に地域に開放されています。館内では、災害時の写真や復興事業等の展示のみならず、お好み焼きの提供もされており、住民や外からの来訪者が気軽に集えるような空間になっています。

※建設にあたっては、手持資金の他、クラウドファンディング、寄付金、補助金等を活用されました。